〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(38)〉

保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み」を振り返って(1)

菊地知子

シンポジウムの概要

二〇〇八年五月に千葉大学を会場に開催された「第六十二回日本保育学会」において、お茶の水女子大学幼保の発達を見通したカリキュラム開発（以下、幼保プロジェクト）では、プロジェクトリーダー浜口順子の司会のもと、表題の自主シンポジウムを行いました。テーマ設定の趣旨を浜口は以下のように示しました。

「育児力やコミュニケーション能力の低下が叫ばれ、子育て支援の在り方が問題化している現在、職業的保育者養成に特化しない〈総合的保育者〉養成が女子大学の学びに必要ではないかという課題意識を背景に、お茶大では、社会の各方面で活躍する女性に求められる子ども・保育理解の経験を育てるカリキュラムを模索している。そのために教職科目と専門科目の担当者の交流を行ったり、多様な実践現場と協力して複眼的に学生の実習を指導したりしてきた。[注1] 今回は、その現場の先生たちと共に、免許・資格と関係ない実習の受け入れが、学生にとって、また現場にとってどのような意義と困難さがあるのかを考えていきたい」。

話題提供者は、お茶大生活科学部発達臨床心理学講座（以下、発臨）をメインとする学部四年間の課程に

おいて、観察や実習などで学生を受け入れてくれている各保育現場から一人ずつお願いしました。具体的には、愛育養護学校から校長の板野正儀さん、「障がい児放課後クラブはすねっこ」から代表の佐藤キミオさん、お茶大附属幼稚園から教諭の高橋陽子さん、そしてお茶大附属いずみナーサリーから主任の私市和子さんの四名です。

また指定討論者として、保育研究者の津守房江氏と、幼保プロジェクトメンバーでもある、お茶大名誉教授の牧野カツ子氏にご登壇いただきました。

当日は、司会の浜口からシンポジウムの企画意図の説明や、話題提供者の紹介があり、続いて現在お茶大でどのように授業が展開されているかの紹介がされました。それに続き、各保育現場のスタッフから、それぞれの現場の概要や保育の様子、学生の受け入れのスタイルなどについて話題提供があり、質疑応答を挟んで指定討論者からお話をいただき、再び質疑応答に入りました。

以下、実際のシンポジウムの様子の前半を、当日の流れに沿ってかいつまんで見ていきたいと思います。

シンポジウムの実際（前半）

浜口　お茶大では、附属幼稚園と附属の保育所であるいずみナーサリーと大学が一緒になって学生を育てていこうという幼保プロジェクトというものがあり、このシンポジウムは幼保プロジェクトの企画で開くことになりました。女子大学における、ということは具体的には私たちの実践ですのでお茶大における、ということになりますが、私たちのやっていることが少しでも社会にとって意味のあることにつながるといいなということを期待して、皆さんのご意見をお聞きしながら、私たちの今後につなげていきたいと思っています。

板野　愛育養護学校は、現在は学校法人愛育学園が運営する養護学校ということになっています。幼稚部と小学部だけの学校で、現在二十三名の子どもたちが通ってきています。[注2]

現在、インターンシップなどでお茶大に限らずいろいろな学校から学生さんに来ていただいていますが、教職の教育実習だけという形ではお受けしていないところが、このシンポジウムの趣旨に沿っているかなと思います。愛育に来る動機もさまざまです。親戚に障碍のある子どもが生まれて障碍について学びたいとか、本では読んだけれども実際に子どもに接したことがないとか、将来教師になりたいという方もお見えになります。近ごろは愛育養護学校だから来てみたいと思って来てくださる学生さんもおられますけれども、連れて来られたのがたまたま愛育で、実習でお世話になってそのまま愛育にいまだにいる、という、私のようなケースもあります。

子どもが主体ですので、あまりカリキュラムをかちっと決めないで、子どもたちが日々始めたことから一日を過ごすということを毎日やっています。学生さんが来るということも、その日の一つの出来事になるわけで、学生さんと子どもたちが出会ってどんなふうに過ごすか、それにより昨日とまた違うことが今日始まるということになります。だから学生さんにとっても出会いだし、子どもたちにとっても出会いになるようにやっていきたいと考えています。

実習生もこうして、お客さんではなくその日のメンバーとして、ほかの保育者と交じって、子どもたちと過ごせるように考えています。子どもが外に出て行くような場面にも一緒に参加していただいて子どもたちと一緒に一日を過ごす。そしてその中で子どもたちについての感触を得る。子どもたちと出会った時に自分はどうとらえるか、自分をどうとらえるかということが焦点化されるのかなと思っています。そして保育の後にそういう感触を、疑問や質問として投げかけてもらい、お互いが子どもたちの一日を振り返るミーティングをするようにしています。そこまでを含めて一日の学生さんたちとのかかわりと考えています。実習に参加した学生さんたちがその日の感触、どんな疑問や問いをもたれたかをお聞きすることが非常に楽しみで

す。そんなふうに受け入れながらやっています。

佐藤　「はすねっこ」は東京都板橋区の都営団地の一角にある小さな施設で、いま四年目のまだまだ未熟な場所です。[注3] 小学生から高校生までの子どもたちが通ってきてくれています。外にも行きますが、なかなか出られず大人と子どもで密な空間で関係をつくりながら一日を過ごすということが日常的です。二〇〇八年度から、夏休みをメインにお茶大の、主に一年生の学生さんたちが来てくれることになりました。「はすねっこ」の場合はカリキュラムというのを特に決めていないんです。それはやっぱり子どもたちが始めたこと、自分の思いから始めたことに一番近いところで環境をつくりたいということがあり、それを学生さんたちもすごく理解してくれて、一日を子どもたちと過ごしてくれていたと思います。子どもたちにとっても、一日限りの一回の出会いではあるけれども、その学生さんたちを信頼して一緒に時間を過ごす、共に過ごすということを、そこにいる人間が皆、お互いにやっていたような気がしています。子どもはその中で生活をしているので、いろいろな形で揺れている、揺れている思いが場を揺らしている、ということもあります。子どもがいろいろな思いを出して、子どもの思いを受けながら、子どもたちの思いに揺れながら、一緒になってその生活をつくっていくという、そこを体を通して一緒にやっていってほしい、というふうに思います。

また、特にプログラムを立てているわけでもカリキュラムを立てているわけでもない中で、学生さんたちが実際に、どういうふうに体験されたのか、子どもたちがどういうふうに感じながら生活したのかということを、どこかで振り返る必要があると思います。そういう意味で保育後のミーティングは大切にしたいと思って、そこはかなり意識的に場をつくっています。

高橋　附属幼稚園では、教育実習として最大十二人、それ以外に観察の授業やインターンシップなど、いろいろな形で学生さんをお受けしています。

子どもの様子を見る時、何を見るかはとても難しい

ことだと思うけれど、おもしろそうだから今日はこの子を見ようとか、ああこんな遊びが幼稚園であるんだっていうことに驚いてちょっとそこに居続けるとか、それは本当に学生さんの、その時にふっと思ったこと、その時、心を動かしたことで見ていてくれているみたいで、それはもう全然こちらも何とも思わず、どうぞいろいろ見ていってねって思っているところなんです。

学生さんたちの多くは十九歳とか二十歳とかですから、もしかしたら私たちのような保育者よりも子どもに近い所にいるかもしれません。でも一方では、子どもが好きとか子どもにかかわる仕事をする、ということのために知識や技術として、頭の中の考えとして、自分に鎧（よろい）のようにくっつけてきた体で子どもを見てしまう、子どもと過ごしてしまう、ということもありがちなように思います。実習やインターンシップであれば大人として、社会人として振る舞ってほしい、という期待も一方ではありながら、くっつけてきた知識や先入観をはがしながら子どもとありのままに、自分もありのままの姿を出しながらかかわってほしいということもあり、その両方を学生さんには期待しているところです。

私市　いずみナーサリー（以下、ナーサリー）は、女性研究者支援、職員の福利厚生が目的のお茶大の中にある保育施設です。六か月から三歳未満児が、その日によって人数は違いますが今は十七名前後、四・五月は少なめで、十名程度で過ごしています。保護者の七割が学部生や院生です。観察実習、インターンシップ、ボランティアの三つの形態で学生を受け入れています。ボランティアについては、発臨の方だけじゃなく生活科の方や、食物科の学生さんも入っています。食物科の学生グループがおやつの献立を作り、週一回手作りおやつを作ってくれます。おやつ作りの後に保育にも入ってくれています。

保育所は小さな子どもたちの生活の場なので、学生さんが入るということで子どもたちが不安にならない

ように私たちは配慮します。子どもには人見知りの時期もあるので、そういう時には同じ空間でもちょっと離れたところに居て、徐々に徐々に慣れてきて近づいて、ということをしてもらったりします。同じ空間で共に生活する人になり、どちらも心地よく過ごせるようになると、気持ちがわかり合える関係になっていくのではないかと思っています。そして学生さんは育児行為にとても自信をもち始めます。たとえば、一、二年時ボランティアで半日だけ入っていたある学生さんが、三年生でインターンシップとして週一回入るようになり、一人ひとりに生活リズムがあるということ、家庭を含む一日の流れの中に保育所の生活があるということに気づいた、と言いました。また、コミュニケーションの難しいとされる〇～二歳児の、泣くことや拒否することの意味を悩みながら考え追求し、寄り添いその子の心を読むことで、子どもへの理解ができるのではないだろうかと伝えてくれた人もいます。ナーサリーは五時半までやっているので、なかなか話し合いの時間がとれませんが、保育士も一緒にお昼を食べながら話す時間を確保しようとしています。

また、大学での振り返りが、学生の学びになって、大学と現場と両方が振り返ることで、理論と実践が融合していけるのではないだろうかと思います。私たち現場の保育士も、大学と記録を共有して学生の疑問に真摯に向き合い応えることで、まだまだ日の浅いナーサリーでの自分たちの保育を振り返るということが、今できているのではないかと思っています。

（次号では、シンポジウム後半の、指定討論者による問題提起と討議の様子をお伝えしようと思います。）

（お茶の水女子大学　幼保プロジェクト　専任講師）

注

1　大学の授業としての総合的保育者養成への取り組みについては、『幼児の教育』第一〇七巻第十号、第一〇八巻第六号等を参照されたい。

2　愛育養護学校の成り立ちや保育については、愛育養護学校五十年史「あゆみ」などに詳しい。

3　はすねっこについては、『幼児の教育』第一〇六巻第十号を、またはすねっこでの実習については第一〇八巻第八号を参照されたい。